

## 「神にできないことは何一つない」

詩編 91 編 1-2 節 ルカによる福音書 1 章 26-38 節

「クリスマス进行」ということが社会一般において当たり前のことになっております。私たち教会の者にとってこのことには様々な思いがありますが、最近の私の思いとしては、これには歓迎すべき面があると思っております。クリスマス进行することが当たり前になっているからこそ、「本物のクリスマス进行教会で過ごしてみたい」と思う人が与えられているのも確かだからです。私たち教会も、クリスマス进行することが当たり前になってきているから、それを足がかりとしてクリスマス伝道に取り組んできたのではないのでしょうか。クリスマス进行することが当たり前になっている、このこと自体は私たち教会にとって喜ばしいことではないかと思ひます。

しかしながらもちろんこのことは、手放して喜べるわけではありません。ほんの数年前までは、一般的なお店でも、教会で用いることが出来そうなクリスマスカードや、様々な商品が売られていました。三人の博士や馬小屋が描かれたクリスマスの商品をよく見かけたものです。しかしながらここ数年、そういった絵柄はほとんど見なくなり、サンタクロースやサンタの格好をした様々なキャラクターで溢れるようになりました。元々教会では、「社会一般で祝われているクリスマスは人間的な思いに満ちたどんちゃん騒ぎである」ということが言われておりましたが、ここ数年でそれがさらに加速したということでしょう。社会はますます「クリスマス」という名前のイベントのもと、キリスト不在のクリスマス进行ようになったということです。

しかしながらこれは、社会一般においてだけ起きている問題ではありません。教会も気をつけなければ、「クリスマス」という名前のイベントのもと、キリスト不在のクリスマス进行ようになってしまう。皆さんは教会のクリスマスの飾りに、どうして赤と緑がよく使われているかご存じでしょうか。それは、赤は主イエス・キリストの血の色、すなわち受難と死を象徴しており、緑は永遠の命を象徴しているからです。つまりクリスマスというのは、私たちの罪のために十字架にかかり、死んで、復活し、罪の赦しと永遠の命を与える、そういう救い主がお生まれになったということを記念しようとしているのです。だから教会のクリスマスは、赤と緑が多く使われているのです。

このことを忘れてしまうと、教会におけるクリスマスの飾りも、巷でよく見られる青や白、ピンクといった色に変えられてしまいます。飾りの色が変わるというだけの問題ではありません。そこに込められている祝いの意味が変わってしまうのです。要するに十字架と復活のキリストを祝うということが忘れられて、ただの人間的な好みを持ち込まれ、クリスマスが人間の祝いに変えられてしまうということです。それは社会一般において起きている、キリスト不在のクリスマス、ただの人間的な思いに満ちたどんちゃん騒ぎと何ら変わりません。

大切なことは、クリスマスで祝われていることとはいったい何であるのか、それを聖書からしっかりと聞いて受け止めていくということです。それがキリスト不在のクリスマスにしてしまわない唯一の方法なのです。私たちは、私たちのために死んで復活し、罪の赦しと永遠の命を与える救い主の誕生をここに祝おうとしているのです。そういう救い主を私たちの心の中にお迎えする、その心の準備をするのがアドベント、待降節の期間なのです。

今、宮崎中部教会は無牧師であり、この説教も代読であると伺っています。確かに今、ここに牧師は不在です。しかし、だからと言って宮崎中部教会に主イエス・キリストが不在なのではありません。主イエス・キリストが不在であるか否かは、牧師の不在であるか否かよりも、御言葉が証しする十字架と復活の救い主、イエス・キリストを信じ受け止めるか否かにかかっています。キリスト不在のクリスマスにしない、そのために本日も御言葉をしっかりと受け止めてまいりたいと思います。

さて、本日の説教題を「神にできないことは何一つない」といたしました。この言葉は37節に記されている天使の言葉をそのまま題名にしたものです。ある学者は、「天使はあらゆる信仰の基本となる信仰をここで宣べている」と語っています。それほど大切な信仰の言葉が、「神にできないことは何一つない」という言葉です。それゆえにこの言葉をそのまま説教題にいたしました。

この「神にできないことは何一つない」という言葉は、要するに「神様は何でもおできになる」ということです。これがニカイア信条の「全能の父」とある、「全能」という言葉で告白されています。全能とは、「神にできないことは何一つない」ということです。

しかしながらこの言葉もクリスマスと同じように、キリスト不在の「全能」ということが考えられてしまうと、人間的な思いに満ちた「全能」の理解になってしまいます。

そもそも「神にできないことは何一つない」と言われておりますが、実は聖書の神様にはいくつかおできにならないことがあります。例えば、聖書の神様は嘘をつくことができません。神様は真実なお方です。そして、御言葉によって天地を創造されたように、神の言葉は力をもって必ず実現するのです。だから嘘をつきようがありません。また、神様は悪いことを行うこともできません。神様は完全に善なるお方だからです。良いこともできるけれども悪いこともできる、そういう意味での「全能」ということが聖書では考えられていないのです。

他にも神様にはおできにならないことがあります。それでも天使はここでハッキリと「神にできないことは何一つない」、神様は全能であると宣言しているのです。これは矛盾しているわけではなくて、「主イエス・キリストの誕生を通して与えられる救いの御業にお

いて、神様にできないことは何一つない」、そういう意味でこの言葉は語られているのです。それは言うてみれば、御子が与えられ、その死と復活とによって救うことができない人は誰もいないということです。どれだけ罪深い人であったとしても、神様が御子によって救えない人はいない、必ず御子イエス・キリストの死と復活を通して救うことがおできになる、そういう意味で神様は全能なのです。このことを受け止めて、本日の箇所さらに聞いてまいりたいと思います。

天使ガブリエルが「おとめマリア」のところに来て、「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる」と祝福を告げます。私たちはこの箇所を読みますと、つついマリアに注目をしてしまうものです。そして、「どうしてマリアは主イエスのお母様として選ばれ、祝福を受けたのだろうか。きっと聖書には記されていないけれども、マリアは素晴らしい信仰者としての歩みがあったから神様に選ばれ、祝福を受けたのだろう」、と考えてしまいがちです。私たちはマリアが特別な存在だと考え、だから神様から選ばれ、祝福を受けたのだと考えてしまうのです。

しかしながら教会は伝統的に、ここには信仰者の経験が記されていると理解してきました。マリアが主イエスを宿したように、私たち信仰者も心の内に主イエスをお迎えし、宿すのです。もしもマリアが特別で、何らかの功績があり、その功績が評価されて神様の選びと祝福が与えられ、主イエスが宿ったと考えるならば、私たち自身もマリアと同じ程度の信仰者にならなければ、主イエスに宿っていただけないということになります。それはつまり、私たちはマリアと同じ程度の信仰者にならないと選ばれないし、祝福されないし、救われないということの意味します。ところで皆さんの中には、マリアと肩を並べるほどの信仰者はおられますでしょうか。自分はマリア並の信仰者であると自負している方はおられるでしょうか。もしもそう思える信仰者が私たちの中には誰一人存在しないとするならば、私たちの中で救われている人も誰一人存在していないということになります。何が言いたいのかと申しますと、要するにマリアを特別だと考える読み方は間違っているということです。そして、マリアが功績によって選ばれ、祝福され、主イエスを宿したと考えることも違うということです。

マリアがどうして神様に選ばれ、祝福を受けたのか。その理由は一切記されていません。ただただ神様が、功績に基づかない一方的な選びを行い、祝福を与えてくださり、主イエスを宿してくださったのです。その証拠に天使が「おめでとう」とマリアに告げると、29節では、「マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ」と記されています。功績に基づいて選びと祝福が行われたならば、戸惑うことも、考え込むこともありません。「ついに来たか」と思う方が正しいでしょう。何の功績もないのに選びと祝福が与えられ、主イエスを宿したから、マリアは戸惑い、考え込んでいるのです。

そして、天使はさらに続けてマリアに与えられた恵みの内容を告げ、与えられた主イエスがどういうお方であるのかを語り聞かせます。しかしなおマリアは理解できないので、34節でこう語っています。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに」。マリアの常識からすれば、男性を知らない自分に子供が宿るはずはないし、そもそも救い主が宿ることはないと思われたのです。

この感覚は、私たちにも少なからずあるものです。私たちは様々な経緯で信仰者として導かれてまいりました。キリスト教学校に入って、教会に行くように義務づけられたから教会に通うようになったという方がおられるでしょう。しかし、その当時一緒に教会に通っていた全ての人が信仰者になったわけではないでしょう。なぜ私が導かれ、私には信仰が与えられ、主イエスが心の内に宿ってくださったのか、不思議に思うことはないでしょうか。

また、皆さんの中には親がキリスト者で、子供の時から教会に通うのが当たり前だったという方がおられるでしょう。しかし兄弟の全員が信仰者になったわけではないでしょう。自分よりも別の兄弟の方が、教会学校に熱心に通っていた。それなのに、なぜ私が導かれ、私には信仰が与えられ、主イエスが心の内に宿ってくださったのか、不思議に思うことはないでしょうか。

皆さんには地域の中で自分よりもいい人、教会の人よりもお世話になっている人という方がおられないでしょうか。自分よりもよっぽど信仰者に相応しそうな人がいると思ったことはないでしょうか。しかし、地域の中で、家族の中で、なぜか私が導かれ、私には信仰が与えられ、主イエスが心の内に宿ってくださったのか、不思議に思うことはないでしょうか。常識的な考えでは理解することができない、どうして私なのか。マリアの言った「どうして、そのようなことがありえましょうか」という言葉は、まさに私たち自身の戸惑いの言葉なのです。

こういう文脈の中で天使は、「神にできないことは何一つない」と告げているのです。あなたには理解ができない、常識外れのことかもしれないが、しかし「神にできないことは何一つない」。あなたがどれだけ相応しくなく、選ばれ、祝福され、救われるだけのものを持ち合わせていないとしても、それでも神様は功績に基づかないであなたを選び、御子イエス・キリストを与え、あなたを救うことがおできになるのだ。あなたが何者であったとしても、神様はあなたを救い、神の子とし、御自分のものとして招き寄せることがおできになる。あなたがどれだけ罪深くて、汚れていても、なお神様はあなたを選び、あなたと共にいることを決断されたのだ。なぜなら、「神にできないことは何一つない」からです。

そして、あなたと永遠に共にいるためならば、神様は、本来あなたよりも大切な愛する御子をも与えることができるのです。これも常識外れのことです。私よりも大切な愛する御子を、私のためならば与えることができるなどというのは常識外れの愛です。しかし神様はこれを行うことができます。なぜなら、「神にできないことは何一つない」からです。

神様は私たちのためならば、たとえ常識外れであったとしても、私たちを選び、祝福し、御子を与え、救うということをしてくださるのです。それが、「神にできないことは何一つない」、全能ということなのです。

私たちは毎週ニカイア信条を告白しています。「わたしたちは、唯一の神、全能の父、天と地と、見えるものと見えないものすべての造り主をします」、そのように告白しています。この「全能」も次の段落、「わたしたちは、唯一の主、神の独り子、イエス・キリストを信じます」と深い結びつきを持ちながら告白されています。神様の全能は、キリスト不在の全能ではありません。私たちを主イエス・キリストによって救い、罪を赦し、永遠に共にいるためならば、神様は何でもおできになるし、何でもしてくださる、そういう恵みの全能なのです。

父なる神様が全能であるからこそ、神様の独り子イエス・キリストが与えられ、恵みの救いがクリスマスの日に実現しました。私たちに求められていることは、マリアのように「お言葉どおり、この身になりますように」と自らを神様の恵みの全能に委ね、神様から与えられる主イエスを心からお迎えすることです。

あと2週でクリスマスです。キリスト不在とはせず、私たちの心をしっかりと神様に向けて、主の御降誕を祝う信仰を整えてまいりたいと思います。祈りをいたします。

<祈り>

私たちのために独り子イエス・キリストを与えてくださった全能の父なる神様。あなたの恵みの御心に感謝をいたします。今、私たちの群は牧師が不在ですが、あなたがおられないではありません。あなたは全能の力によって私たちに御子を与え、宿らせ、共にいてくださっています。どうか、私たちを救うためであればできないことは何一つない、御子をも与えてくださる、あなたの全能の力と恵みの御意志に寄りすがらせてください。主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン